

## 神のかたち・神の似姿

神は仰せられた。「さあ人を造ろう。われわれのかたちとして、われわれに似せて。彼らが、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をほうすべてのものを支配するように。」

神は人をご自身のかたちとして創造された。神のかたちとして彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。

神は彼らを祝福された。神は彼らに仰せられた。「生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をほうすべての生き物を支配せよ。」

(創1:26~28)

人は墮落し、神のかたちの一部を失い、その他の部分も損なわれて不完全なものとなった。人に神のかたちを回復させるのは、神のみわざである。救い主は、そのために、来られた。

キリストが律法を終わらせられたので、信じる人はみな義と認められるのです。



(ロマ10:4)

律法が目指していた終着点にキリストが立ったので

律法が目指していた終着点とは、完全な聖さ、神のかたちの完成である。

神のかたちを完全に持つ者が、義人である。

人として義人となったのは、キリストだけである。

キリストを信じる者は、みな、キリストと同じ義人と認められる。

そして、信じた者はみな、神のかたちを回復され、真に義人となる。

その過程が聖化であり、その完成が栄化である。

本日は、神のかたち・神の似姿について、学びます。

## □アウトライン

1. 「神のかたち」と「神の似姿」が記されている箇所
2. 「神のかたち」と「神の似姿」とは、意味内容が違うのか？
3. 神のかたちとは・・・大まかに言うと
4. 神のかたちとは・・・具体的にその構成要素を言うと
5. 神のかたちの回復

1. 「神のかたち」と「神の似姿」が記されている箇所・・・5か所
  - (1) 創1:26~27  
「われわれの かたち  テシュレム として、われわれに 似せて  デムウス」
  - (2) 創5:1~2  
「神は人を創造されたとき、神に 似せて  デムウス 彼を造られ」
  - (3) 創9:6  
「神は人を神の かたち  テシュレム にお造りになったから」
  - (4) Iコリ11:7  
「男は神の 似姿(かたち)  ギエイコン であり、」
  - (5) ヤコブ3:9  
「神に かたどって(似せて)  ギホモローシス 造られた人」
  
2. 「神のかたち」と「神の似姿」とは、意味内容が違うのか？  
5か所の使い方を見ると、同じである。同じ意味のことばを並べて繰り返すのは、ヘブル語の表現における特色のひとつである。
  
3. 神のかたちとは・・・大まかに言うと
  - (1) 人は神のかたちとして造られたのだから、人が備えているもので、神と共通しているものである。
  - (2) そのうち、墮落のときに失われた部分と、ダメージは受けたが残っている部分とがある。失われたのは、聖さである(参考 イザヤ6:2~5)
  - (3) 人のうちに残っている部分があるから、墮落後も人は、依然として「神のかたち」をその中に持っている。それゆえ、創9:6ではすべての人の命が尊重されるべきである。Iコリ11:7では、男は教会でかぶり物を着けてはならない。ヤコブ3:9では、人を呪ってはいけない。
  
4. 神のかたちとは・・・具体的にその構成要素を言うと
  - (1) 身体的な特徴ではない。
    - ① ヨハネ4:24 神は霊である
    - ② Iテモ1:17 神は目に見えない
  - (2) 人格的である点で似ている。人格を持つ存在とは、理性と感情と意志を有するという。神は人格的であられるのと同じく、人もまた一人ひとりが人格を持っている。

- (3) 霊的である点で似ている。ヨハネ4:24で「神は霊である」とあるように、人もまた、その内側に永遠の霊魂を持っている。
- ① 創2:7 人は生きものとなった
  - ② 1コリ15:45 最初の人アダムは生きた者となった
  - ③ 下線部は直訳すると、ともに「生けるたましい」である。人は物質的部分である体と非物質的部分である霊魂とから成る。霊魂には、霊、たましい、心、思考、意志、良心の6つの要素があつて、それらは互いに重なり合い、一体となっている。下線部では、霊魂を指すときに「たましい」を代表させて使っている。
  - ④ 人の物質的部分である体は死ぬことができるが、非物質的部分である霊魂は決して死ぬことはできない。永遠に不滅である。この霊的であるという点で人は、神のかたちである。
- (4) 倫理的である点で似ている。
- ① エペ4:19「(異邦人は) 道徳的に無感覚になった」
  - ② コロ2:20~23「この世の生き方・・・『すぎるな。味わうな。さわるな。』というような定めに縛られる・・・人間の戒めと教え・・・謙遜とか、または、肉体の苦行などのゆえに賢いもののように見える・・・」
  - ③ 神は倫理的・道徳的である。同様に、人もまた倫理的・道徳的な感覚を持っている。暗黒街や裏街道と呼ばれるようなところであっても、やってよいこと、してはならないことを区別するのは、そのためである。
- (5) 社交的である点で似ている。
- ① ヨハ15:9 父がわたしを愛された
  - ② 神は、三位一体の神である。父、子、聖霊の間に愛の関係がある。神ご自身の中に永遠の交わりを持っておられる。その意味で、神は孤高のお方ではなく、社交的なお方である。
  - ③ 人もまた、社交的な存在である。他人との関係を構築することを良しとし、構築できないと苦痛を感じる。
  - ④ 信者は神との交わりの中に入れられる。1ヨハ1:3「私たちの交わりとは、御父および御子イエス・キリストとの交わりです」
  - ⑤ 信者が神との交わりの中にあるなら、信者同士も互いに交わりを持つことができるようになる。
    - 1ヨハ1:3「あなたがたも私たちと交わりを持つようになる」
    - 1:7「私たちも光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わりを保ち」

(6) 権威的な点で似ている。

- ① 神は全宇宙を支配しておられる至高の主権者であられる。
- ② 人はこの権威の一部を神と共有する存在として造られた（創1：28）。墮落後も人は動物界に対して一定の権威を有する（創9：2）。

## 5. 神のかたちの回復

(1) ロマ8：29 「御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められた」

- ① 聖化において、聖霊は信者を神の御子のかたちに徐々に一致させてくださる。そして、最終的聖化のとき（栄化のとき）、信者は完全に御子のかたちと一致する。
- ② 人が墮落によって失った聖さは完全に回復され、さらに「もはや罪を犯すことのできない、確定した聖さ」に達する。
- ③ これは、あらかじめ定められており、落ちこぼれる信者は一人もない。

(2) I コリ 15：49 「私たちは、・・・天上のかたちをも持つのです」

- ① 天上のかたちとは、天上におられるお方のかたち、すなわち、御子イエスのかたちである。
- ② 信者は、日々、徐々に、御子のかたちに一致させられていくが、地上の生涯においては完成に達することはない。肉体の死のときに、内側から罪の性質が消去されるからである。
- ③ 信者は、肉体の死後、靈魂の中間的状态（天のパラダイスにて）を経て、教会の携挙のときに復活の体を受け、天上の世界に入る。そのとき、信者は御子のかたちと完全に一致するであろう。ゆえに、「天上のかたち」を持つことになるのである。

(3) II コリ 3：18 「鏡のように主の栄光を反映しながら、栄光から栄光へと、（主と）同じかたちに変えられて行きます」

- ① これは、漸進的聖化または経験的聖化である。
- ② このプロセスが完成し、信者が「同じかたち」になるときは、教会の携挙のときである。そのとき、ロマ8：29のとおり、信者は御子のかたちと完全に一致する。また、I コリ 15：49のとおり、天上のかたちを持つ者となる。
- ③ このかたちにおいて、信者は神の栄光を受け、神の栄光を反映する者となる。